

先日、2年2組で数学の授業を参観した。授業者はT先生だった。しばらく教室の後ろで見えていたが、席が空いていたので、そこに座り、生徒になったつもりで授業に参加してみた。

「集合」の学習だった。導入は、生徒にとって身近な学校生活のことを集合の内容に結び付けていた。きっといつも数学が身近なものになるようにと工夫しているに違いない。生徒は全員集中して数字を介して考えていた。思考していた。生徒の姿から学習に対する意欲が感じられた。

板書の文字がかなり大きい。これならば、後ろの座席で視力がよくない生徒でも心配なくノートに書くことができる。余計な神経を使わなくて済む。ただし、デメリットもある。T先生は何度も黒板消して板書したものを消していた。通常であれば、これはあまりよくないことである。

だが、T先生は数学の授業における2年生の目標として、ノートにはやく書くことを掲げている。この授業でも3回はやく書くことを促していた。生徒もそれに応えている。だから、板書を何度か消すことになっても支障がない。

T先生の説明は無駄がない。教員にありがちな必要のない“繰り返し”もない。授業のテンポがよい。生徒は板書された問題を解きながらノートをとっていく。サクサクいく感じである。だからといって無理なスピードではない。実際に生徒と同じように授業に参加して、そう感じた。

T先生は昨年梁川高校に赴任した。たぶん、この1年間で試行錯誤を繰り返しながら、本校の生徒にとっての数学の授業というものを模索してきたのだろう。先生と生徒がかみ合っているように思えた。

授業後、T先生はすぐに校長室にやってきた。ノートを手にはしている。私が指示したのではない。自主的にきたのである。アドバイスを求めにきたのである。この姿勢がすばらしい。前述のことを含めていろいろなことを話した。授業に対する向上心がうかがえた。

その中で、私は「先生はなぜ生徒を指名しているのですか」と聞いた。すると、「生徒を活躍させたいんです」と即答だった。そこで、指名はよほど意識していないと偏るという話をした。一度記録を取ってみるとわかる。自分では全員を指名しようとしていても案外偏るものである。

指名された生徒が答えていたのは、ほとんど数字のみだった。これでは表現力はつかない。なぜそう考えたのかまで答えさせると、また違った展開になる。授業者の方は、時間を気にしながら進めているので、なかなか難しいのではあるが。

授業の最後に出された問題がよかった。私も生徒になって考えてみたが、「おやっ」という問題だった。答えが何通りか出てくる問題だった。T先生は、4名の生徒を指名して黒板にそれぞれの答えを書かせた。4通りの答えが黒板に提示された。非常によい。

だが、ここで時間が来てしまった。残念である。ここから、4名の生徒になぜそのように考えたのか説明させ、全体で考えることができればよかった。惜しい。このような場を50分の中で10分から15分とれると、授業は変わってくる。いわゆるアクティブ・ラーニングである。T先生にはぜひ実践してほしい。

校長室でT先生とこのような話をした。楽しかった。こちらは、T先生に何か指導しようという気はない。授業を介して一緒に考えるのが楽しいのである。T先生には伝えた。「新採用のR先生にも見せたかったなあ。勉強になったと思う」

職員室の座席配置を見ると、R先生の左がT先生である。この1年間でR先生はT先生から、かなりの影響を受けることになるだろう。T先生にはぜひうまくいかなかった話、苦労した話、悩んだことなども話してほしい。それがR先生にとっては宝物となる。

本校の場合、授業をする上で一番大変なのが数学の先生、次が英語の先生ではないか。生徒の多くは、小学3年生くらいから算数・数学で苦労をしてきていると思われる。多くの生徒にとって高校が最後の学校教育の場となる。今までは、わからなかったりできなかつたりして苦労してきた数学だが、高校の3年間で少しでもわかるようになった、できるようになったという思いをもって社会に飛び出してほしい。少しでも英語を身近なものに感じてほしい。T先生ならやってくれそうである。大いに期待している。